

非専門家医のための小児・産婦人科診療のコツ 苦手意識の高い小児・婦人科疾患を判りやすく解説

日時：平成23年10月1日（土）16：00～19：00

講師：北垣 毅 花見川中央クリニック 院長 場所：すみだ産業会館

本音の家庭医 Dr. G u t s こと花見川中央クリニック院長の北垣毅先生を講師に迎え、10月1日土曜日に東京都墨田区のすみだ産業会館において「非専門家医のための小児・産婦人科診療のコツ」をテーマにMHS医学臨床セミナーを開催いたしました。

日本の非婦人科医にできること、難しいこと！

北垣先生は米国で家庭医療の研修を終えて現在家庭医として千葉県で診療しています。

当然米国の家庭医の診療と日本の一般内科・家庭医の違いを痛感されておられます。

米国では家庭医はほとんどすべての診療科目を担当します。今回は皮膚科領域について講演をいただきました。今回は小児科と産婦人科についてです。

前半は婦人科でした。米国では家庭医は通常分娩もおこないます。そのため研修医は半年間みっちり産婦人科について学びます。

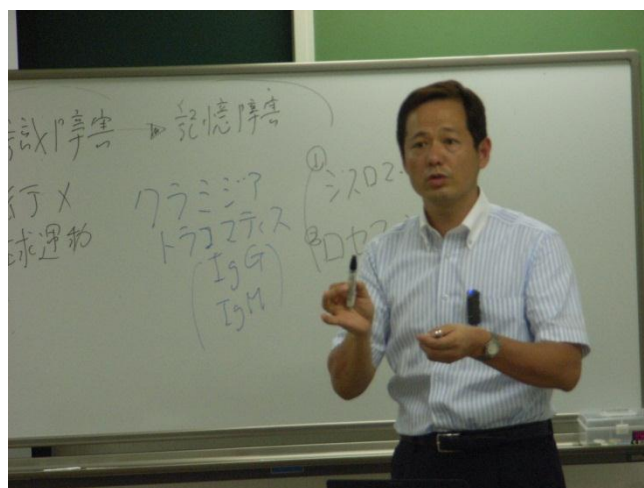
ところが日本では産科はもとより婦人科分野も診ることが苦手の非婦人科医が多いのが現状です。米国では下腹部痛を訴えてきた患者には当たり前のように内診をしますが、日本では患者の拒否反応も強く、また医師も積極的に内診をおこなうことはありません。

ニュースでは小児科・産婦人科医の減少を報じてずいぶん経ちますが、家庭医がこの分野を担当しない限りいつまでたっても「産婦人科難民」が続出していくだけです。

講義ではほかに妊婦が服用しても良い薬や、週数による催奇形性と胎児毒性、ウェルニッケ脳症の予防、乳癌・子宮頸癌について解説してもらいました。

小児もできれば避けたい患者と言われます。泣かれて時間が余分にとられてしまう、小児特有な疾患、それにモンスターペアレント問題。

昔は夜間体調が悪くなれば近くのかかりつけ医に行って「診てください」とお願いしたのですが、現在の夜間小児救急では患者である小児だけでなく、親への対応にも注意が必要となります。



話して書いて動き回ってのDr. G u t s北垣先生

小児の講義では症例別に様々な対応について解説いただきました。専門医へのコンサルタントのタイミングや必要連絡事項等受講者には参考になられたことと思います。

小児科は患者と友達になり、親を味方につけることが何よりも大切とのことです。患者はまだ何もわからない子供ですから親に対する指示が家庭医として大切な仕事です。

次回セミナーは10月23日（日）すみだ産業会館で「胸部 X 線・CT 画像のポイント」をテーマに神奈川県がんセンター 呼吸器内科部長の山田 耕三先生を講師に開催いたします。